

# 直方ミニバスケットボールクラブだより



チームづくりは毎年あらたに・・・



また新たなチームづくりを

チームづくりは、毎年あらたに始めます。毎年子どもが違うから当然のことです。

長年活動しているクラブチームの財産として受け継いでいるものもあります。それは直方クラブの基盤をなしているもので、クラブとして大切にしている習慣、風土と言ってもいいでしょう。一朝一夕にできるものではありません。長い時間と労力をかけてこれまでの子どもたちといっしょにつくりあげてきたもので、とても貴重な財産です。中学生や高校生になった子どもたちも、ここにくればそれをわきまえたうえで、参加してくれています。

そういった基盤は大切に維持しながらも、そのうえに立って行うチームづくりについては、毎年新たなスタート地点に立ちますし、チームカラーも毎年違います。それが、地域に根ざし、「ちょっとやってみよう」と思っけて入ってきた子たちがいっしょに集まって活動できる小学生のスポーツクラブの姿です。

多くのクラブチームもそうだと思いますが、直方クラブは、その年の6年生を軸にチームをつくります。6年生とはいっても毎年同質ではありません。毎年違いがあります。その年の6年生の子どもたちの個性や特性(※)に応じてチームづくりをすすめていきます。そしてそのチームづくりは私一人で行うものではなく、必ず子どもとのミーティングを重ね、一つ一つ確認しながら進めます。多少まとまった時間を要するので、土曜や日曜の活動日に時間を設定して行います。そのため時間がかかりますが、大事なプロセスなので、ていねいに進めていきます。

※個性とは、その子に備わっている、その子の特徴づける性質、性格。

特性とは、対象となるものごとに対してその子もっている能力、適性、性質、性能、特徴。

毎年同じではないこと、○年生だからといって同じではないこと、どの子も同じではないこと...、それはあたり前のこと、と多くのおとなが認識できていると思いますが、それでも、ふとしたことで、自分の思い描いているイメージと違っていたら、「○年生なんだから...」とか、「○年生にもなって...」と、くくった言い方で、子どもを詰めてしまうことがあります。何をどこまで求めていいかも、一人ひとり違います。

だれにもある成長・発達のでこぼこ

脳科学の研究が進み、脳の機能について、いままでわからなかったことが少しずつ明らかになってきています(もちろんいまだ解明されていないことの方が多いと言われてはいますが)。研究されている脳の機能には、少し専門的な表現になりますが、視覚認知、聴覚認知など感覚入力処理に関するもの、記憶、学習、予測、思考、言語、問題解決など高次認知機能と呼ばれるもの、情動に関するものなどがあります。言い換えると、見て理解する、聴いて理解するなど五感を使って理解し情報を処理する能力と、記憶する、学習する、予測する、思考する、言語、問題解決など少し複

雑な要素を含んで行動にうつしていく能力です。具体的には、次のようなケースがあります。

聞いてものごとを理解することが苦手だが、見れば理解することができる子がいます。その子には話して聞かせるだけではなく、できるだけボードに書いて見せて説明します。このタイプの子は、聞いているように見えるので、話ただけで理解していると思われがちですが、確かめてみると何も理解できていないということがあります。

見て理解することが苦手でも、聴いて理解している子がいます。見ていないので聞いてないと思いがちですが、言った内容はちゃんと理解しています。このタイプの子は、通常「人の話は、ちゃんとその人の顔（目）を見て聞きなさい」というのが、教育現場では推奨されているので、注意を受けやすいです。そのことへの反発心をもって、二次的な障害を引き起こしてしまうことがあります。

話すことは苦手でも、書くことは得意という子もいます。このケースの子は、これまでもよく知られていたと思います。人前では緊張してなかなかうまく話すことができなくても、書かせてみるとしっかり自分の気持ちや考えを表現できているという子です。授業中、発言を求められたとき、つまづくことが多いので、余計に話すことの苦手意識が強くなってしまいがちです。話すことを無理強いすると、「場面緘黙」など、二次的な障害を引き起こしてしまうことがあります。

書くことは苦手でも、話すことは得意という子もいます。かなり饒舌（じょうぜつ）に話せるので、文字や文章もしっかり書けるだろうと思いきや、作文などを書かせてみると、ほんの2～3行書くのに困っていたり、文字はひらがな表記ばかりで漢字がほとんど使われていなかったり、「わ」と「は」、「お」と「を」、小さな「つ」「や」「ゆ」「よ」などの文字がまったく使われてなかったり、筆圧が弱く、とめやはねがはつきりしなかったりする子がいます。このタイプの子は、日頃筋道立ててしっかり話せるので、文字や文章を見ると、いいかげんに書いているようにしか思われず、叱られてしまう経験をもっている子は少なくありません。

## 変化に向き合う力を

文字や文は、人類がそれぞれの土地で互いの意志疎通のために編み出した優れた道具（ツール）で、他の動物には見られない力です。しかし、その力の獲得には、得て・不得手があります。文字はある種、記号ですが、脳の機能としてもともとそれを認知しにくい子がいます。ましてや日本の場合は、ひらがな、カタカナ、漢字を操って文章を構成します。その使い分けは、かなり高度な能力で、外国の人たちが日本語は難しいという理由の一つになっています。

現代のようにパソコンが学ぶ道具の主流になってくると、日常生活は便利になる一方で、書く作業能力はますます低下するのではないかと危惧します。もちろんそれに替わる新しい道具があるのですから、どうしても難しい子はそれを活用する力を獲得することで社会生活は通常通り行うことができます。

計算力も同様のことが言えます。紙上での計算力を求められているのが、長い間の日本の学校教育の主流ですが、実生活においては、計算機、さらにパソコン上でというようにどんどん進化してきています。いい、悪いはあるでしょうが、そうになっているのは現実です。基礎的・基本的な考え方を知っておくことは必要ですが、実際の社会生活においては、計算機やパソコンで答えを出すことができれば、ほぼ困ることはないでしょう。

前にも述べたように、いま社会は、過去に例のない速さで急速かつ劇的に変化しています。今の小学生の将来を、今のおとなが保障することなど、とうてい困難です。私たちおとながこれまで経験したことのない社会が到来しているのですから。それに、学校そのもののしくみや教育制度、受

験制度やシステムなど、今後どんどん変化していくでしょう。今でも相当変化しており、受験制度やしくみも変わってきています。かなり複線化しています。推薦や専願等で本番の試験の前に半数以上の子どもは進学先を決めている学校もあるようです。就労に際しても、受入れ企業の方も、その職種や働き方等、大きく変化していくと思われれます。

その変化に直面したとき、子ども自身が、自分（たち）で考え、判断し、行動できる力をもっておかなければ、これからの社会を生き抜いていくことが難しい、と言われていています。そのために必要なのが「学ぶ力」と「つながる力」で、主体的に学ぶ、対話的に学ぶ、深く学ぶことが重要とされています。

### スポーツ界においても

スポーツにおいても、スポーツ科学、スポーツ医学といわれるように、各専門分野の力を寄せて科学的な内容を取り込んで行われるようになっていきます。ただ、小学校段階においては、活用のしかたを十分考えなければなりません。単にチームを強くするためとか、優れた選手を育成するためなどに活用することには問題があります。しかし、子どもたちがスポーツを楽しみながら技術向上を図っていくためとか、個に応じた練習段階や内容・方法を考えるためなどであれば、大切な指標です。

時代が流れ、社会が変化していることを認識しながら、子どものこと、教育のこと、スポーツのこと、将来のことを考えていかなければなりません。

いろいろな子どもたちがいます。「いろいろ」だからおもしろいことがあります。個性豊かな子どもたち、それぞれがもつ特性を發揮して、チームとなしていくプロセスに意味があります。そこに大切な学びがあります。うまく歯車がかみ合わさってまわり始めたらおもしろいチームができるのではないかと期待もしています。互いの違いを認め合うというのは、大変なこともありますが、それを楽しんでいくことができればと思います。大切なことは、子ども個々が力をつけること、そのためにつながりを育むことです。子どもが成長する姿を、ゆっくり見守り、励まし、応援してやってください。